FOOTBALL GIRLS

「あんたほんとにサッカーやる体型じゃないよね」

いきなり失礼な……。でも言い返せない。その点、弓子は典型的なスポーツウーマンだ。がっしりした肩、発達した筋肉を見せつける腕、固そうな脚、平らな胸。一七八センチと背が高い彼女のポジションはセンターフォワード。ポストプレイヤーという奴だ。相手ディフェンダーに囲まれながら後方からのロングボールをうまくトラップし、走り込んできたもう一人のアタッカーにパスする役。なんといってもサッカーの花形はフォワードなのだ。

「背が高い……それだけだよ。もう少し横幅があったらディフェンダーにされるに決まってる」

弓子は昔から背が高いと言われるのを嫌がっていた。でも、だったら私の悩みだって分かると思うんだけど。

「あんたが羨ましいよ」

うん。よく言われる。身長一五三センチ。ウェスト五二、ヒップ八〇。なのにバストだけはGカップ。ポジションがまた右サイドバックときた。ゴール前から、一気に相手ゴール前に駆け上がって味方のパスを受けてセンタリング。いちばん走らなきゃならないポジション。また、サイドバックの攻撃参加が好きなんだ、うちのコーチは。ブラジル大好きだしね。おかげで私はGカップをゆさゆさ揺らして敵陣まで走り、ボールを奪われたらまた味方の最終ラインまでGカップ

をゆさゆさ揺らして走らなければならない。うちの女子サッカー部、なんでギャラリーが多いか知ってる？　一番の目当てはそりゃキャプテンの矢野さん、すっごい美人だからね。もう一つ、私が胸を揺らして走るのを見るのが目的なんだよ。揺れるたんびに囃したてるんだよ。嫌になるに決まってるじゃない。

「そういや最近ギャラリー減ったね」

弓子はにやにやして言った。

「さやか、こないだついに地金が出ちゃったから」

弓子は小学校のときからいつも一緒だった。高校まで一緒とは思わなかった。

「さやかは中学校のとき、三人不能にしたんだもんね」

「そんなことしてないよー。不能だなんて嘘だよー」

大声で叫んで、はっと口を塞いだ。ここは部室じゃない。ファーストフードの店。誰か振り返ってこちらを見ている客がないか、きょろきょろして確認した。弓子はおかしそうに笑って、なおも言った。

「だって、そういう話になってるよ。あんたに蹴られてから勃起しなくなって悩んでる男の子がいるって……」

ちょいと不安になった。不安を押し隠すために、さらに抗議した。

「嘘だよお。そりゃお尻に触ったり、更衣室覗いたり、胸に触ろうとしたり、そういう連中には

……仕方ないじゃん。嫌なものは嫌なんだし、そのくらいしないと男子って絶対にやめないんだもの」

「蹴ってやった数はもっと多いもんね」

「まあそうだけど……でも当然じゃん、そのくらい」

握力も背筋力もない私だが、脚の力だけは異常に強い。ミドルレンジからのフリーキックは私にお任せ。小柄で脚力のある右サイドバック。それだけはロベルト・カルロスと同じだもん。知ってる？　ブラジル代表、世界最高の右サイドバック。強烈な弾丸ライナーのフリーキックは世界中の人気の的。小柄で、脚の力だけは強い。

確かにサッカーボールだけ蹴っていれば、もっともてたかもしれない。でもしょうがないじゃん。初めて男の子のボールを蹴ったのは九歳のとき。六年生の男の子を泣かしたってんで結構武勇伝になったけど、おかげでさっぱり男の子がよりつかない。だから高校に進学したとき誓ったんだ。絶対に、あれはやめようって。

でも……。

「いい、弓子。いつも言うことだけど。胸が大きくていいことなんか一つもないんだよ。肩は凝るし、男はみんな嫌らしい目で見るし、胸が大きいだけでHだって思われちゃうし。私が反撃に出るのは当然でしょ」

胸の大きく開いたコスチュームの女の子は、たいてい胸が小さい。胸元を気にせずにすむから

だ。私だって、夏は暑いし、蒸れるし、ああいう服を来てみたい。でも着たら最後、男どものスケベ光線の晒されるに決まってる。

「だから嫌なんだ。小さくする手術があるんなら受けてみたいよ」

「あるだろうけど、たぶん高いよ」

「あら、ここにいたの？」

振り返ると、矢野さん。我等がキャプテンにして背番号１０の司令塔。小学生のとき、県大会で優勝しＭＶＰに選ばれたこともある。はっきりいってうちの女子サッカー部は矢野さんでもってる。彼女なしでは、うちのような弱小サッカー部、とてもじゃないが試合にならない。

「ちょうどよかった、さやかに相談があるの」

相談？　光栄です。なんでしょうか。

矢野さんが、ちらっと弓子を見る。弓子が気をきかせて「はずしましょうか？」と言う。駄目です。弓子とはずっと仲良しで、お互いに秘密は持たないと約束した仲。

「一緒にいてもいいでしょう。先輩」

お願いすると、矢野さんはしばし躊躇っていたが、「じゃあ、絶対に内緒ね」と念押しして、私たちのテーブルに座った。

「さやか、この間の練習のとき、小松の……その……」

矢野さんは上品だ。その言葉を口にしたくないらしい。私だって、聞きたくない。と弓子が口を挟んだ。

「金玉蹴ったことですか？」

馬鹿。その言い方、露骨すぎ。

「え……うん。そう。そのこと」

うわあ。何かやばいことになったのかな。

あのとき、私たちの練習を眺めていた小松って二年生が、私の胸についてすっごい卑猥な野次を飛ばした。挟んでくれえ、とかなんとか。私は切れた。ピッチを出て小松に詰め寄り、出てけ、とか、謝れ、とか怒鳴った。私は、自分ではおとなしいほうだと思うんだけど、切れると結構やばい。小松は逆切れして、私を突き飛ばした。彼の掌が強く私の胸を押した。目が眩んだ。

男の子って知ってるかどうか知らないけど、胸って女性の急所なんだ。サッカーする上でもここは泣きどころで、胸でボールをトラップしようとして乳房に命中し、なんど痛い思いをしたことか。

でけえ、山みたいだ、と小松が叫んだ。そこから先はあんまし記憶がない。だいたい、ああいうことをするときは、私自身、理性がなくなっちゃってて、気がついたら男のほうがうずくまって泣いてる。そのときもそうだった。膝小僧にぐにゃりとした肉と、二つの固い塊の感触があって、あっと思ったら、小松は手であそこを抑えてうずくまって、いてえ、いてえって涙をこぼし

てたんだ。
「先に胸に触ったのは小松なんですよ！」
私は立ち上がって叫んでいた。今度は店の客が私を見た。私は赤くなった。
「いいんだ。練習の邪魔だったし、私もあいつ嫌いだったし、ちょっと胸がすっきりしたよ」
矢野さんが微笑んで、「座りなよ」と言った。
「で、相談なんだけど……さやかって、男の子の、その急所を蹴ったこと、何度かあるわけ？」
「そんなこと……」と言おうとして弓子がまたも先制カウンター。
「中学校のとき三人不能にしたって噂なんですよ」
「嘘です」
「それは嘘かもしれないけど、私が知ってるだけで十人くらいは蹴ってます」
私は落ち込んで俯いた。絶対に知られたくない秘密を、憧れの矢野さんに知られてしまった。どうしよう。もうサッカー部に顔出しできない。退部だ。いや転校だ。不登校児になっちゃおうかな……。
「すごいのね」
矢野さんの感心したような声。嘘だ。矢野さんは優しいから私に配慮してくれてこんな声を出してるけど、本音じゃ、とんでもねー女だ、と思ってるに違いないんだ。
「私も、やってみたいな」

え。顔をあげる。矢野さん、目を伏せて、思い悩むような顔つき。
「何かあったんですか？」
弓子が訊ねる。
「実はね……とても困ってるんだ。知ってる？　三年生の藤田って奴」
知ってる。五人しかいない相撲部の主将。肥満体でおっかない顔した奴だ。
「あいつが、私につきあえって迫ってたの。今日、練習前にちゃんと断ったんだけど、そうしたら逆恨みして、いつかお前をレイプしてやる、いや、他の部員と一緒に輪姦してやるって脅すのね。本気じゃないとは思うんだけど、なんだか不安で……」
そうか。今日の練習、なんだかプレーが不安定だったのは、そんなことがあったせいなのか。
「だから、護身術のひとつも覚えておいたほうがいいと思うんだ」
「でも……」
私は困惑した。
「私だって、別に格闘技やってたわけじゃないっすよ。ただ、切れるとひとりでに体が動いちゃって。なんてのかな、癖なんです。私だって困ってるんです。あれは、下手して潰れちゃったら、その、できなくなっちゃうっていうし、そこまでしたくないんだけど、どうにもならないっていうか……」

「そうなの」
「だから、どこか道場に通って本格的に習ったほうがいいと思います。教えてくれと言われても教えられるものじゃないんです」
「わかった」
矢野さんは微笑んだ。
「見事に決まったものだから、どこか道場で習ったのかと思ったけど、そういうことなのね。じゃあ自分でどこか探すことにするか……。まあ、藤田もただの脅しだと思うし、マジでやろうなんて思ってないだろうし」
矢野さんは立ち上がった。
「そうそう。今度の地区予選の一回戦。あんたたちもベンチ入りするみたいだよ。頑張って練習しようぜ」
そう言って店を出ていった。よかったじゃん、と弓子が私の肩を叩く。嬉しかった。でも、同時に、矢野さん大丈夫かな、と心配になった。

翌日の放課後。
練習に出ようとして、相撲部の部室をとおりかかった。校庭の隅にある小さな小屋のなかに土俵がある。ちょっと気になって窓から覗いてみる。部員たちが藤田の胸を借りて練習している。

あらためて見ると小山のようだ。背は高くないが、肩の筋肉が盛り上がって、足腰も頑丈そうだった。矢野さんも筋肉が発達していて身体能力は抜群だが、さすがに相撲取りにはかないっこなさそうだ。
藤田は顔じゅうにあばたがあって、眼が小さく、唇だけは女のようにぶ厚い。正直いって醜男だ。こんな奴にレイプされるなんて、思っただけでも身震いがする。先にあいつの金玉蹴ってやって不能にしてやろうか。
だめだめ。それって犯罪。正当防衛にもならない。私はため息をついて部室へと歩いた。

練習を終え、着替えをすませてみんなで部室を出た。同じ方向に家がある部員と電車に乗り、しだいに一人降り、二人降り、最後は私と弓子と矢野さんだけになった。私たち三人は同じ駅だ。
電車を降りて改札を出る。三人とも家は別の方向にある。「それじゃあ」と別れた。三分ほど歩いて、ちょっと気になって駅に引き返したら、案の定、矢野さん一人で立っていた。やっぱり一人で帰りたくないらしい。
「先輩」
声をかけると、矢野さん、ちょっと驚いたような顔を見せた。
「一緒に帰りましょうか」
矢野さん、嬉しそうに「いいの？」と訊ねる。

実は矢野さんにはカレ氏がいる。菅野さんという三年生。矢野さんとは対照的に、ひよわで無口な性格で、文芸部に所属して詩や小説なんか書いてる。矢野さんに言わせると、心の美しい感性豊かなひとらしいけど、ボディガードとしては役に立たないのは一目見ればわかる。

もっと丈夫で強そうなカレがいれば、家までの見送りを頼めるんだけど、菅野さんじゃなあ。矢野さんの性格では、ひよわな菅野さんを変なことに巻き込みたくないと思うだろうし。

「駄目だよねえ。脅しだと思っても、そのことで頭がいっぱいになって……。こんなことじゃ、地区予選が心配だな。さやかに頑張ってもらわないとね」

歩きながらそんなことを言う。

「だって私、レギュラーじゃないし」

「じゃあ、私のかわりに出てよ」

「そんなあ、駄目ですよ。矢野さん抜きで勝てるわけないじゃないですか」

「昨日の夜ね。いつも、近くの公園でリフティングとか練習していて、ふっと男の人がやってきたの。ただのサラリーマンなんだけど、私、びくっとしちゃって、体が動かなくて、男の人は、すぐに公園を横切って出ていったんだけど、なんか涙が出ちゃってさ。練習できなくて……。走って家に帰って、部屋に籠もって一晩中泣いちゃったよ。恥ずかしくて親にも相談できないし、菅野くんだって……。彼、ああ見えてけっこう熱くなるほうだから、うっかり藤田にサシで抗議したりしたら危ないかな、とか……」

こんな気弱な矢野さんは初めてだ。試合に劣勢でも常に諦めずに、大声を出して味方を励ましている。冷静で、相手からひどいタックルをくらっても、すぐに起き上がって調子を乱すことなくプレーする。とても強い人かと思ってたけど、やはり怖いのだ。

矢野さんと別れて、家に帰り、夕食をすませてベッドに入ってあれこれ考えているうちに、私の矢野さんをあんなに悩ませる藤田の野郎が許せなくなった。

翌日。

相撲部の部室の前でばったり藤田に出くわした。練習に遅れそうになって急いで走っていて、ぶつかったのだ。

岩にぶつかったのかと思った。ぶっとばされて、尻餅をついた。

「なんだよ、てめえ」

見上げると、藤田の奴、にやにやして私を見下ろしていた。そばに、相撲部員らしい肥満児が一人立っている。

「お、すげえ巨乳だな。こんな奴、うちの学校にいたのか」

後輩らしい相撲部員が同調してげたげた笑う。

私は切れた。憤然として立ち上がった。

「ぶつかっといて、そんな言い方はねーだろ」

「なんだと。そっちからぶつかったんだろーが。一年のくせに生意気言うな」
「るせーよ。謝れ、この変態！」
「変態？」
「そーだろーが、顔の不自由なデブ、もし矢野さんになんかしてみろ。てめえの金玉ぶっ潰してやるからな！」
藤田の顔色が変わった。
「てめえ……」
詰め寄ってきた。私の体が自然に動いた。
ビンゴ！
スナップをきかせた前蹴り！　足の甲が見事命中。あ、なんか変な感触。固いものが平たくなったような……。
藤田は股間を両手で抑えて地面にうずくまった。真っ青な顔で目を剥き、口をぽかんと開けている。
「あ……あ……」
小さな眼が真っ白になった。口から涎が垂れた。そのままうつ伏せに倒れた。
やっちゃった……。
理性が戻ってきた。やべえ。蹴った直後に襲ってくる何時もの狼狽。見ると、藤田にかけよっ

た相撲部員が凄い眼で私を睨んでいる。
私は逃げた。くるりと踵を返して走った。一目散に走った。遠回りをして部室まで走った。サッカーやってるんだから持久力はある。それでも部室のドアにたどり着いたときは、へなへなと座りこみ、肩で息をした。とんでもないことしちゃったんじゃないだろうか。恥をかかされた藤田らがリベンジしてくるのは間違いない。
その日の練習は大変だった。トラップミス、パスミス、空振り。コーチに散々叱られて、これじゃベンチ入りなど夢もまた夢。

家に帰ってからも机に頬づえついて落ち込んでいたら、携帯電話が鳴った。
出ると知らない男の声。
「てめえ、よくもやってくれたな」
頭のなかが真っ白になった。
「藤田さん、タマが二つとも潰れてたぜ。一年の女にやられたとなっちゃ恥だから、おめえのことは伏せることにしたけどよ。このまますむと思うな」
そのまま携帯は切れた。

「どうしたの、さやか。こんな夜中に呼び出すなんて」

ファミレスに現れた弓子が文句を言いかけて、俯いたままの私の異変に気づいたようだった。
「何かあったの？」
私はぽつりぽつりと経緯を離した。顔をあげると弓子の顔色が変わっていた。
「……矢野さんには連絡した？」
私は首を振った。
「大変じゃん。矢野さんって母子家庭で、お母さん遅くまで働いてるんだよ。まだ一人かもしれない。そんなところに押し掛けられたら……」
すぐに連絡しなきゃ、と携帯を取り出した。つながらない。
「すぐに行こう」
弓子は立ち上がった。

タクシーをつかまえて、矢野さんのマンションまで急いだ。階段をかけあがって矢野さんの部屋の前まで来て、どんどんとドアを叩く。
ドアが開いた。矢野さんが出て来た。
「先輩、無事だったんですね」
私は思わず矢野さんに抱きついて泣き出した。
ふと、顔をあげると、矢野さんは真っ青な顔で、あらぬ方向を見つめている。

「どうしたんですか？」
弓子が矢野さんの肩を揺すぶった。矢野さんは呟くように言った。
「菅野くんが……」
「菅野さんが？」
「誘拐された……相撲部の連中に……たったいま携帯に電話があって……私一人で部室まで来いって……来ないと、菅野くん、ひどい目にあわされるって……」
わっと矢野さんは泣き出した。
私は決心した。
そもそもの発端は私が藤田の急所を潰してしまったことだ。私自身でオトシマエをつけなければならない。
「私が行きます」
矢野さんと弓子が同時に私を見た。
「私が悪いんです。弓子、先輩を頼む」
私は駆けだした。

夜の学校。
照明はいっさいない。私は塀を乗り越え、グラウンドを全力で横切った。

相撲部の小屋だけ照明がついていた。ドアに手をかけた。鍵がかかっている。私はどんどん叩いた。ドアが開いた。
「ぐっ」
ドアを開けた相撲部員がうずくまった。もちろん、出会い頭に膝で急所を蹴ってやったのだ。うずくまった相撲部員の背後に、人影が見えた。
菅野さん！　両手両足をぐるぐるに縛られ、柱にくくりつけられ、ぐったりとなっている。その周囲に三人の肥満体。
「てめえは……」
一人が呻いた。あのとき、藤田の側にいた奴だ。
「こいつだ。こいつが藤田さんのタマを潰したんだ」
「あー、そーだよ。私だよ」
私は怒鳴った。
「ふられた腹いせに、レイプしてやるなんて脅すような奴、タマ潰されて当然だろーが。矢野さん、あんなこと言われてどれだけ落ち込んだか……それを関係ない菅野さんまで誘拐して」
「なんだ、矢野じゃねえのか」
一人が言った。
「てめえに用はねえよ。さっさと矢野を呼んでこい」

「呼んで、どうしようってのさ」
「きまってら。カレ氏の見てる前でレイプしてやるのさ」
「そんなことさせるもんか」
三人はげたげた笑った。
「よくみりゃ、おめえ、なかなか巨乳だな。まずはおめえからレイプしてやろうか？」
「やってみろよ」
私は怯まなかった。
「その前にてめーら全員キンタマ潰してやる」
三人はじわじわと私に詰め寄った。実をいうと、すでに後悔していた。かっとなって一人でここまで走ってきたが、一対一で相手が油断しているならともかく、三人がかりでこられては、とてもじゃないがかなうわけはない。しかも三人とも山のような大男。
「こ、来いよ」
私は叫んだ……つもりだったけど、
「声が震えてるぜ」
怯えてるのがすでに見抜かれてた。
三人は、両手の掌を広げ、ゆっくりと近づいてくる。私は後ずさりして、何かにぶつかった。さっきタマを蹴った奴だ。太った体を折り曲げて呻いているが、ドアをふさいだ恰好になってい

て、飛び越えるには座高高すぎ。逃げられない。どうしよう。泣きたくなった。
三人は勝ち誇ったように私に近づいてくる。私の顔が泣きだしそうに歪んでいるのが自分でもわかった。怖い。叫びたい。でも叫ぶこともできない。体が硬直した。
と。

何かが空気を切り裂いて飛んできた。
一人が「わっ」と叫んで顔を背けた。つづいてもう一人、頭を抱えてうずくまった。もう一人が両手をあげて顔をふせいだ。その手にボールがぶつかった。
振り向くと、ドアの向こうに矢野さんと弓子が立っていた。足元にサッカーボールがいくつも転がっている。矢野さんがボールをを蹴った。見事なインフロントキック。カーブを描いて相撲部室に飛び込んできて、正確に一人の部員のお腹に命中。
助けにきてくれたんだ！
次々と蹴りこまれるボールに、三人の相撲部員はパニックに陥っていた。矢野さんと弓子が、部室に駆け込んできた。
弓子と私は、蹴りこまれたボールを拾い、三人の肥満体めがけて投げつけた。
「わっ、よせ、危ない！」
何が危ないだ、この野郎。一人が壁に背中をくっつけている。そいつをめがけて思い切りフリ

ーキック。
「ぎゃっ」
ボールは弾丸ライナーでそいつの股間に命中した。目を白黒させて倒れた。見たか、これぞロベルト・カルロスばりのフリーキック。私の得意技。泡吹いて倒れてら。ざまあみろ。
矢野さんが柱に縛られ失神している菅野さんに駆け寄り、ロープをほどこうとした。一人の部員が矢野さんにとびかかった。振り向いた矢野さんの頬に張り手をかました。矢野さんは仰向けにひっくりかえった。その部員は矢野さんにのしかかろうとした。
「ぐえっ」
矢野さんが突き出した右足がそついの股間に命中した。私は走った。背後からもう一度股間を蹴りあげる。そいつはがっくりと膝をついた。矢野さんが立ち上がり、体を横に傾けて顔面にボレーシュート。そいつは二メートルばかり吹っ飛んで失神した。
残るは一人。

「ま、待て」
残る一人が慌てて叫んだ。
「わ、わかった。謝る。ごめんなさい」
「謝ってすむ問題かあ！」

私は怒鳴った。そいつは泣きそうになって膝をつき、土下座した。
「ごめん。許して。ふ、藤田さんの命令なんだ」
「命令？」
「そうなんだ。こんなことやりたくなかったけど、主将の命令には逆らえない。予定どおりやれって……」
「予定どおり？」
そいつは、しまったという顔をした。
「ふーん、そうか」
弓子が言った。
「要するに、藤田がタマを潰されたので復讐したんじゃなくて、その前から菅野さんを誘拐して矢野さんをレイプしようって計画だったのね」
「そ……それは……」
「許せない」
矢野さんが声を震わせていた。
「先輩、こいつら全員、藤田と同じ目に合わせてやりましょうか！」
私は叫んだ。相撲部員が悲鳴をあげた。
「いや……それはまずいよ。この一件がばれたら、次の地区予選への出場が微妙になる」

矢野さんは冷静さを取り戻していた。怯える相撲部員に近寄り、厳しい顔で言った。
「このこと、絶対に秘密にできる？」
「わかりました」
相撲部員は夢中で叫んだ。
「もし警察なんかに訴えたら、あんたたちが菅野くんを誘拐したことをばらしてやる。そうなったら、あんたたち、退学処分じゃすまないよ」
「わ、わかってます。喋りません」
「じゃ、立って」
矢野さんは微笑んだ。部員はほっとしたように立ち上がった。と、矢野さんはそいつの股間を蹴りあげた。
相撲部員は両手で股間を抑えて前かがみになった。
「あんただけ無傷じゃ不公平でしょ」
激痛に硬直してしまった相撲部員の肩を叩き、「いくよ」と私たちに声をかけ、小柄な菅野さんを背負って相撲部を出た。
私たちははしゃいだ。
「先輩、かっこよかったあ」
私は言った。

「最後、台詞まで決まってましたねえ」
「ありがとう。さやかのお蔭よ」
「私だけ、蹴らなかったな」
弓子が呟いた。
「蹴りたかったの？」
「そういうわけじゃないけど……」
顔が残念そうだった。私と矢野さんは笑った。
「おや……」
矢野さんの背中で菅野さんが眼を覚まし、きょろきょろと周囲を見舞わした。
「どういうことだ……」
矢野さんは菅野さんを下ろし、微笑んだ。
「なんでもないの」
それから私たちを見て、唇にひとさし指をあてた。

相撲部員の連中、約束は守ったらしい。地区予選には無事出場できた。私は試合には出られなかったが、ベンチ入りは果たした。試合は、矢野さんのフリーキックを途中交代の弓子がヘディングでゴール。その一点を守りきり、数年ぶりに公式戦勝利をおさめた。

事件は表沙汰にならなかったが、ずいぶんとギャラリーが増えた。今度は女の子たちだ。私たちの武勇伝は誰からともなく噂になって広まったらしい。遊んでいるように見られがちな女子高生だが、ほんとは真面目なコのほうがはるかに多い。男たちの欲望に悩まされている彼女たちにとって、私たちは英雄なのだ。
男の子たちが以前にまして寄りつかなくなったような気がするけど、かまわない。しばらくはサッカーに専念しよう。急所蹴りするからといって寄ってこないような情けない男の子なんかと付き合ったって仕方ないのだから。（１９９９・11・11）